日記

一九三八年（昭和十三年）

宮本百合子

青空文庫

一月一日（土曜）小雨。

除夜の鐘を戸塚できいた。靄がこく柔かくこめている大晦日の晩で、カネ坊をかえすのにもたしてやるものを買いに三人で八時頃伊勢丹へゆきベルがジリジリいうなかで私は帯、いね公は、S・Fの羽織、その半エリそれぞれ買い、たかのに腰かけた。戸塚の街で私年来の宿望であるとその道具を買い、雑煮茶わんも五つ買う。「いいお年越しでございますこと！」こわいろで云って笑う。二十九日午後と午前とに内務省図書課ジャーナリズム関係者を呼び出して、中野、私、戸坂、岡、鈴木安蔵、堀真琴そのほかすべてで八名の名を云い、こういう人たちに書くなという権限のないのは御承知のとおりであるから、挙国一致の精神に賛成して、諸君自発的に云々という形で執筆禁止をした。或人がそういう人達の生活問題はどうなるのですかときいたら、そこまでは干渉しませんとか、それは権限外ですとか云った由。寿江子来て泊る。小雨ふり栄さん雑煮をたべに来て、おだやかな正月也、この家の近所門松なし。私たちにとって全く新しき年はじまる。忘れがたき年越し。一九三三年の暮と本年と。

〔欄外に〕

四時すぎてから三人で出て、日比谷へオーケストラの少女を見にゆく。ストコフスキーという者の指揮ぶりを見てハハンと思う。ああいうのは一種のパントマイムであって、あの位の演奏者の技術がなければストコフスキー存在出来ない。あの気どりかた！

一種の大俗物である。かえりに林町へまわりシャケをたべて来る。

一月二日

〔発信〕第一信。こういう内容の第一信とはMも予期していなかったであろう。

起きて下に降りたら栄さんもう大分あみものをすすめている。けさはパンをたべる。それから私はすこし手紙をかく。お礼や鶴公の就職にやら。すぐ夕方になって、一寸郵便を出しにゆき、夕飯。そして栄さんかえる。もう風呂に入ってねようとしているときバラさん高島田でやって来る。手拭をもって。ひさよろこんでいる。入毛をかりる約束などしている。十一時すぎかえる。シュトルムの「みずうみ」をよむ。一寸よろし。

やはり念頭をはなれぬのはいかに生活すべきかということである。勉強の方法とテーマとはありあまる。それにはこまらない。だが、どうして金をとってゆくか。この問題の解決は容易でない。又生活の形をどうするかということも。林町の裏へ家を建てさせてそこに住む。——フム。しかし、この時期の生きかたが実に実に名状すべからざるほど大事であるからくさりかかる危険に近づくことは出来ない。床に入って考えて、いろいろ考えて、うとうととなって電気を消してねた。

一月三日（月曜）曇

講座の方の原稿はどうするのかと思っていたら敏氏より手紙。稲

は新潮へ小説をもって行ったらリストに名がないのに檜崎氏すっかりあやまってしまった由。情を知ってトク名でも何でものせたら編輯者をやるというのだから。トーマス・マンのようなさわぎをおこさずやる法を考えついたのなり。文学界発禁。人民文庫発禁。中、改は、大森義太郎の映画時評をのせたのがいけないと云って発禁、サク除、ホホー。米が来た。稲のところへやるために爺さんをたのむ。

夜まで待ったがい来ず。フラリと出かけて見た。子供をつれてテムプルを見せたら言葉がよく判らないし字もよく分らないので案外面白がらなかった由。ソバを二人でたべて十一時ごろかえって来た。五銭のコーヒー店を出したらというプランを立てている。何だかよさそう。それだけの話があるだけでも気が楽になり、夜フーフー眠った。三十日以来のことなり。「何かしていてもここんところでいつも考えちゃっていてねえ」

一月四日（火曜）

珍しくさむい。四日に面会に来ますと云い、行かないと何事かあったかと思うといけない。それで出かける。さし入れだけした。かえりに林町へゆき、途中80で水牛の印をつくる。

寿江ひとり。おみやさん。いろいろ音楽をきく。テムパニーが出征しそうだと云って悄気ている。マラーの作品がやれるかやれないかと気をもんでいる由（新響）

夜三吾さん、ヴァイオリンをかえしに来た。彼の楽器はくらべて見ると全く胴がふくらんでいる。ふくらみすぎている。ダンスホールが閉まると、楽士があまってどうなることかと云っている。石井漠この間のトリオの放送をやめた由。ほめてくれるのは首のつながること故結構だと云った。

一月五日（水曜）

テーブルのところで新聞をひろげたら、岡田嘉子若き愛人杉本良吉と北樺太にて行方不明と出ている。国境守備警官慰問に出かけ、そのかえりに行方不明になった由。

白揚社へ本を買いに出かける。よく晴れて、さむい風が吹いて、日が照っている。白い雪の上にあるそういう空と日光とを思い出した。実にまざまざと。モスクワのマローズの午後。林の間の雪の上にさしている斜光。早い夕暮。夜。芝居。橇の馬の音など。そして凍死の可能をも。深い感想をもって歩いた。どうか命のあるように。

つる。合鴨を買って待っていたのだからと云って十時頃になって夕飯をたべた。いろいろ話し。

新　三笠の本のこと。

人民文庫解散。

〔欄外に〕

はじめて水道が凍って午ごろになって湯をかけて、やっと出た。

○白揚社の店員曰ク、森山さんも絶版になさるそうです。

一月六日（木曜）

久しぶりで森川町のおいなりのところを通った。木村氏はあすこに、まだ住んでいられるのかしら。

五日にはひとりで来たいと云っていたと云って、夕方ふっとやって来た。二時ごろまであれやこれやを話す。とまる。コーヒー店の話、段々具体的になって来る。うれしい。

一月七日（金曜）

一緒におきて、片方が顔を洗っている間に私は大いそぎで御飯を二膳たべて一緒に出かけた。辻氏に会う。あいさつをする。きょうは病監の方でない。ドアがあいていて、入ってゆくと、もうすぐいて、ドアをしめかけている私に「どうしたい?」と云った。執筆禁止の話をしたら、しきりに足をふみかえて、身じろぎして、笑いながらホホーと云っていた。「ちっとも心配しないよ」

かえりに一寸森川へまわって、林町へゆく。寿、ばらさん。夜国かえる。日曜国府津へドライブすると話している。頭の中をスーと風にふかせたく、行きたいと思う。だが、すこしつかれていて目がまわったりするのに又その午後かえるのはどうかと思い。

ツーさん、何年ぶりかで逢う。国と二人の話しぶりはこっちできいていて居心地わるい。スケートのような話しかた。

〔欄外に〕

面会。笑って、びっくりして笑っていた。その目で私を見て下さい。

艱難を艱難と思わせない力というものの不思議さ。

一月八日（土曜）

〔発信〕第二信

手紙をかいて、一寸おひるをたべて出かける。

留守かと思ったら台所の方にいて、おしるこのようなものを御馳走になった。映画を見る。上海。ひどいひどい戦いなり。肉弾ということの意味が実にまざまざとわかった。決死隊というものの内容も。市街戦というもののすさまじさ。

かえりに牛肉をかって来てたべ、話をする。やはり奥の方へひっこんだ家へゆく由。家賃がもっと高いところへ今引越せる生活術というものは面白し。

こうづへのドライブへはやめにした。カゼがなおっていないから。それに横腹のためにもよろしからず。

一月十日（月曜）

読売の記者来。越冬プランはいかがですか

「スタンドバーをおやりになるそうじゃないですか、お妹さんと」

「冗談でしょう！　やれることとやれないこととありますよ」

「宮本さんの御実家は大変お金持だそうじゃないですか」

「昔からの伝説でね」

――○――

ふらりふらり市場の方から歩いて来たら、むこうから二人づれの女来る。どこの女かと気にもとめず大分近くなって見たら一方は咲、おや誰かしらと見たら、それが寿。バケタりな、ばけたりな。これだから女はいやなり。美味いチョコレートをくれた。咲先へかえる。

〔欄外に〕

生活の全面的再組織ということは実に大問題であり、大事業である。箇人箇人の持っているすべての条件が皆箇的にプラスとマイナスに作用して来ることが余り歴然として居て、実に沈思せざ

るを得ない。永年に亙ることなのだから、いよいよ重大でなかなか易きにつき難し。本能がアラームを発する。哲人的ポーズ、受難者的ポーズでは、せいぜいよくて偶像になるにすぎず。生きるということは生活するということ也。生理的生に非ず。

一月十一日（火曜）

おひさ君を洗濯にと思ってつれて行ったら、センタクはけさやっちゃった、あら惜しいと。

それから又出かけたら、工合よし。六時頃かえりかけていたら、ガラス戸の外に女客あり。いやがってあわてて送って来て、何のことか親類のお嬢さんを一寸送って、だって。可笑しい。

いろいろ話す。つるやとしようという話。夫婦でいろいろ話せるという方の面が単純に感じられた。話せるという条件が何もプラスだけではないのに。いつか夜中バクハツのとき、ハッと目をさまし、あら一寸何でしょう、何だろうというとたんの夫婦の近さというものを感じた。それに似ている。女の心の滑稽さ、そして又ただ滑稽と云い切れぬもの。

一月十二日（水曜）

ひどい風が吹いて寒い。だが空がいかにも碧い。一点の雲もなく碧くて日光がキラキラしている。急に思い立って上り屋敷から豊島園までのって行って見た。かえりにバス。十一寺前というところがある。浄土宗の寺ばかり両側に並んだところ、つき当りはカラリとした墓地で、むこうに松の丘あり。いかにも珍しい。ノドがいたくなったのでかえった。頭の中些かさっぱりとする。生理的サッパリだから力弱し。かえって手紙の返事をかく。大変感情のニュアンスの濃いものになった。

〔欄外に〕

第三信。十二月二十三日の不が、ナーヴァスに消しをつけてやっと届いた。新しい年へのよい祝詞がこめられている手紙。

一月十三日（木曜）

やっぱり二階がしまっている。横丁から入ったところのつき当りの家も皆二階をしめている。支那の女の児の大きいオキャガリ小坊子。実にいい顔をしていて、ながめると気がぱーっとひらける。おきゃがり小坊子のところが又よろし。ねえ、そうじゃないか、ねえ、と話せるような恰好と顔とをしている。はりこだが。月曜日までにカゼをなおすと云っている。新しい女のものの包みと新しい一寸しゃれた形の椅子。いね子の家の茶の間とそこの生活とを思わず思いくらべた。そして苦しい気がした。箇々の生活のちがいというものが、その細部まで箇々のものとしてあらわれて来るのを見る辛さ。自戒。云わば餅のヒビが日一日と深くなってゆくのを見るような気持。生活の垢、塵と生活への親しさというものの脈絡。それだから林町のはなれ説へはなかなかおいそれと承服出来ない。

一月十四日（金曜）

見舞にゆく。いかにも気合のかかった人物。いささか才気と勝気とにまけている。腹が年じゅういたいよし。おといの晩なんかうなりどおし。

三井□四十代の男はくいつきそうな顔をしている。

新しい連中、一つことを三度ぐらい云わなくっちゃわからない。そう云ったときの巻舌と顔の表情、軋んでいる生活。

一月十五日（土曜）

〔受信〕本年の第一信着。四日に書いたもの。消印は十四日。

小さい洋服を着た女。「書いてもらおうと思って送っていたが、送るのをやめちまおうかと思って。」逆な話。文化の本質を考えることと、目先の一二冊の消費経済的リンショクさとの対比。こういうところに小市民風な打算がちいさい頭を支配するのかと思ったら、何だか仕事そのものも、いかにも自由学園だと思っていやになった。詩の誤植一つ総がかりでゾーガンするような良心と、大局になると、こういう矛盾した相を示す良心。

○おしょうゆとようかんをおみやげ。海岸へゆくようすすめる。

○下のひとが病気になってヴァイオリンをひけない。うつりたい。

○結婚話、千百円で家を買い、別に資本を出してやり、五十円の台所セットを買う由。私のお祝いは灰皿！　五十円の台処セットを買うから何もいらん、というには感服した。そういう家持ちの仕度のあることを忘れていた。おなべをあげようか、とか、時計をあげようかとか云っていたに対して。「生活の窮迫を知っている女のひとだから大変いいと思う。」どういう角度からだろう？　よく相当の家では、どっちかというと下の家から来た嫁がよいというが。―

一月十六日（日曜）

〔発信〕第四信。

朝鮮志願兵制。十七歳より。二年。第一期七百人。歩兵。

ロマン・ロラン。「大戦のときスウィスで捕虜のために手紙をかいてやる仕事をした。」

負傷している兵士のために手紙を書いてやる仕事、それさえもさせぬ、彼等の不幸に真の同情を抱いているものであるからという理由で。人間的善意のその低度へまでの圧伏。

○医学雑誌の男来。百円足らずの金で一箇の人間が転って行っている姿。課長と飲んだ。ランチでも二円ぐらいのを食うので、ぜいたくになって食堂ではくえない、三十五銭ぐらいのランチ、朝は××会でパンでもたべる云々。

一月十七日（月曜）

警保局図書課に禁止についてききにゆく。中野と。

事務官が話す。「実は早速手紙をよこして、自分はそういう思想をもっていないどころか殆ど反対の側に近くいるから云々」と云ってよこした方が二人ばかりあります。そういうのは、最近のキカイに適当にカンワしたいと考えて居るわけですが、云々。

話はここから出て来る。ダンピングなり。純毛品はS・F時代には貴重品でねがあがるものなり。「来月ごろでも又上りましょう」「いや、それより早く何とか御通知いたしましょう。ただ私は近くかわるかもしれず」云々。

一月二十日（木曜）

今月暮して見て、生活の統計をとって見ることにする。

自分たちの家は、これまで二年ともったことがなかった。動坂二月から十一月まで。上落合十月から次の五月まで。ここはどの位もつのだろうねと話していたとき、十二月二十七日が来た。一年に数日不足している。我々の生活の幾変転は、一貫したものがあることによって生じる外面的なことではあるが、やっぱりくやしい。ここを動くとすれば。又すぐどこかにうつる、そういうのはいやである。よくよく考えてのこと。

一月二十一日（金曜）

吉祥寺へ行った。角の杉林のところ、右手はすっかり様子がかわっている。

一月二十二日（土曜）

田村町六丁目にゆく。いろいろの様子をきく。予想のとおり。手紙は出さないことにしてかえる。若い女のひとがお茶をくんで出してくれる。いかにもこの辺の住人らしいあかぬけたほっそりさ。下町のほっそりさというのは、日光の不足といくらか関係があると感じる。

ひさを戸塚へ手つだいにやる。くたびれて気分がわるいと云ってねていて出かけなかった由。

一月二十三日（日曜）

きょうは日曜日でゆくことが出来ない。手紙をかきはじめ、日記をくって見たら、来年は月曜日。七年目。七年目毎に私たちの23日月曜日がめぐって来るというわけである。

柳瀬さん来。いろいろの話。娘たち二人、上女学校一年、下小学五年。妻君の死んだときのことその他。

午後からひさ戸塚。

〔欄外に〕

バラを二輪買って来て、テーブルの上のマジョリカにさした。淡黄のバラ。手紙を書いているとさしのびた花からかすかな匂いがして来る。

一月二十四日（月曜）

面会。熱六度五分位の由。二三年ぶりのこと！　大いによし。大いによし。しかしまだすっかり起きてはいられない。一日おきていて、その位になったらよい。

執筆禁止のこと、ああいうところでは分って分らない。生活の感情が。内務省へ行った話をする。「そうかい、それはよかった」「するべきようにするだろうと思っているよ」「箇人のことではないからね」云々。深い信頼から来る何とも云えぬ悠々さ。

気分よさそうに、昔ながらの顔つき眼つき。うれしい、いい心持になって、かえってくたびれが出て、眠ろうとしたらバラさん来。ひさ五時半に戸塚へ手つだい。十時頃まで二階でグーグーねてしま

った。

一月二十五日（火曜）　〔発信〕第五信

一月二十六日（水曜）

鈴木氏のところへゆき、福田さんという人に会い、戸籍のことを相談する。やはり廃嫡にして分家した方がよい。

かえりにタバコやにきいて行ったら、もうこの間うち度々きかれたと見えてよく知って居り、同時に或表情をももっている。便利で、湯に近くていい。茶の間のよこがすぐ通れるようになっていて、そこには陽がささないのがよくないが。二十五円な由。いろいろ話し。こっちの顔につけてはなさない眼が切なく、はりきっていて苦し。素朴な信頼にたよっているところ。

一月二十七日（木曜）　〔受信〕一月十□日の

分が着いた。

この頃すこし調子が整って来た。頭の調子が。云って見れば、一九三二年来の遑（あわただ）しい生活が急転したのだから、気分が落付き、こういう事情の中で着々仕事をしてゆけるようになるには一ヵ月や一ヵ月半はかかろう。

どたばたは今月だけにして来月は仕事にとりかかる。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集　第二十四巻」新日本出版社
　　1980（昭和55）年7月20日初版
　　1986（昭和61）年3月20日第4刷
入力：柴田卓治
校正：富田晶子
2018年6月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日記

一九三八年（昭和十三年）

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　宮本百合子
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/